

紹介と批評

社会調査史研究に向けて

——川合隆男 編

『近代日本社会調査史』

I・II・IIIを読んで——

一

このたび川合隆男編『近代日本社会調査史』I・II・III（以下、『調査史』と略称）を手にする機会を得た。社会科学者なら誰もが一度は手になることになってであろう大きな仕事である。私自身、いま数人の研究仲間とともにシカゴモノグラフの編纂の作業に従事しているが、その作業は私の多忙に臆病が加わって絶望的なほどに遅れている。川合氏等は私たちがやろうとしていることよりもはるかに大きく困難な仕事を、実にスピーディにやり遂げた。まずは偉業達成にエールをおくりたい。

さて私は、近年の欧米における社会調査史研究のたかまりの中で、調査史上画期的と目される一連のモノグラフを《読む》ことの基礎的重要性が広く認識されるようになってきていることに、

かねてより関心を抱いてきたが、ここに来て、ある種のモノグラフからあたかも口うらを合わせたかのように、美しい「虚像」をつむぐ傾向がみられることに違和感を禁じ得ないでいる。ここではモノグラフこそすべてであるという雰囲気が充満している。モノグラフを織りなした調査者そのひとがどのような生身の閱歴をしるしていようと、そうした生身にとらわれてモノグラフが理解されるべきでないこと、逆にモノグラフをそれとして読み込んでゆくにつれて、ことばの背後に隠れている事実が私たちに語りかけ、その痕跡が縦横に拡がる中で調査者の生活者としての航跡がおのずと浮かびあがってくるのが指摘される。そしてモノグラフの「時代をこえる」質が取りざたされるのである。川合氏はこのような傾向の派生をどのように観じるのであろうか。はなはだ興味深いが、今回の『調査史』で見ると、氏は社会調査史研究の起点に立ちかえり、モノグラフを時代にスライドさせて《読む》ことの原則を強調するように思われる。

いうまでもなく、モノグラフのことばが私たちに語りかけることによって与える痕跡には、時代の垢がくつきりと附着しており、調査者をまったく無化してしまうところではそのゆがみと厚さがいかにほどであるかを描述することはできない。私自身はさしあたり、時間軸に沿った読み方を基本に据えて、調査者の生活者としての来歴にこだわらなから、社会の問題・矛盾に対する調査者の構えが資料への怖れと科学者としてのセンスの

彫啄を交えてひとつの稊りをもたらすという事実、換言するならモノグラフの身体に、調査者の対象的世界との《交感》を通して資料の裾野をひろげてゆくという「置き換え」の感覚が活きづいているという事実を確認したいと考えているが、それは川合氏が『調査史』において社会調査史研究上の論点もしくは課題としているものに交叉している、と思う。ともあれ、『調査史』は私のきわめて制約された問題関心と重ねあわせて読んでも、おもむきの深い書物であるのだ。

そこでまず、『調査史』において編者川合氏がみせる舵取りの方向とそれともなう内容の構成について一瞥しておこう。もとより大部の上、個々のテーマ設定や切り口が変化に富むゆえ、以下の読み取りにかなりの恣意がはたらくことは避けがたい。全貌を伝えることについては初めから断念している。

二

川合氏は『調査史』をつらぬく基本的動機を「行政官僚や在野の民間人であれ、行政調査や社会観察・社会調査等を通じて近代日本における多様な生活像・歴史像をどのように観察・調査・記録をし続けて、それら『観察』や『調査』を人々の相互のコミュニケーション過程、『交わり』としての行為をどのように位置づけ、人々の生活行為にどのように関連づけていったのか、更に理論形成や政策形成にどのように活用してきたのかを再検討してみることである。」(Ⅱ・iiページ)と述べ、具体

的に「わが国の歴史的・社会的・文脈のなかで、どんな調査活動が、だれによって、いつ、どこで、何故行われ、どのようにして行われたのか、という設問のもとで個々の調査活動の全体像を……発掘する」(Ⅲ・i~iiページ、傍点は原文)という課題を設定する。そこには調査至上主義の許で見えなくなってしまった《実践》の契機をすくい出すことによって社会調査を再定式化しようとする川合氏の熱い思いがヴィヴィッドに活きづいている。それは「社会調査が、方法の肥大化、方法論的禁制・抑制、巨大化する官僚機構・調査組織、部分的・皮相的・機械的な調査、それらによる人間と歴史の細分化・断片化・管理操作化に傾斜していく動きに対して、より生き生きとした人間の生き様と歴史の歩みを見据え、実践するための思想として方法として模索し確立されていくべき」(Ⅱ・八四ページ)「人々の不安の『深層』と無関心の『構造』を共に考察しようとする歴史的・社会理論構築とのかかわりのうちに、社会的現実・社会問題の中で自らの主題を深めつつ社会観察・社会調査が試みられるべき」(Ⅱ・八三ページ)という主張によくあらわれている。

しかしこの主張には、さらに日本近代への反省視角に裏うちされた現行社会科学・社会学にたいする鋭い批判認識がかくされているのである。川合氏はわが国の社会調査史研究にかかわるプロブレマチックとして、何よりもまず「社会学思想、社会学理論・社会学理論の偏重と調査至上主義への分極化」(Ⅰ・四ページ)をとりあげ、その分極化の間で調査史が大きく欠落し

ていることを指摘する。氏によれば、このことは社会調査論のサイドで歴史的社会的文脈と調査過程（理論構築過程）が軽視されてきたことと無関係ではないが、より決定的なものとしては日本近代とともにあった社会学の形成と展開のあり様が大きい、という。それは私なりに翻案していえば、日本の社会学が一貫して西欧社会学の輸入にあけくれ、経験的社会調査の制度化的プロセスが十分に埋め込まれてこなかったこと、そしてその結果、社会学と社会調査の虚しい分化が避け得なくなったことというふうに概括できよう。もとより、川合氏は偏狭なアンチ・モダニズムに与しているわけではない。件の批判認識は「社会思想、理論と社会調査という二つの伝統が相互媒介的に継承されてきており、さまざまな理論的バースペクティブが競合している」欧米社会学の一動向をしかと見据えた上で呈示されているのであり、あらためて氏のブルーラルな立論構成の立場が読み取れる。ともあれこうして、「近代日本の社会調査史研究を近代日本の社会科学史、社会学史の一環として位置づけ」（Ⅱ・iiiページ）る川合氏の「独自」の手法がうちだされるのである。

さて川合氏の言葉を直接援用するとして、「落ち穂拾いのための探索であり、戯れでもある」（Ⅰ・iiページ）そうした手法が安定的に応用され成果をおさめるには、さしあたり八つの論点、すなわち(a)個々の調査の全体像についての考察、(b)調査の歴史的社会的背景、(c)一連の調査活動、調査運動の展開、(d)

経験的社会調査、経験的社会学の制度化、(e)社会調査と社会形成、社会運動との関連、(f)社会学思想、社会学理論、社会学史との関連、(g)社会調査、社会調査史と社会学教育、(h)社会調査史の国際比較、が深められなければならない、という。これらの論点は「互いに関連して考察すべきもの」というふうに述べられているが、それぞれの論点をさぐってゆくと、つまるところ(b)から(h)が(a)に収斂してゆく（つまり(a)が総論で(b)から(h)が各論にあたる）ように思われる。実際、川合氏の論の展開はやや明瞭さを欠いてはいるものの、大筋としては(b)から(f)を適宜論じながら、その後に(a)へと導くという方法がとられている。それがもっとも顕著にあらわれているのが、以下にみる時期区分においてである。

川合氏が「特定の調査事例が調査事実の報告として年代誌的に列記されている」（Ⅰ・一二ページ）ような支配的な動向を向こうにおいて、あらためて社会変動を画した時点とのかかわりで設ける、近代日本における社会調査史の時期区分は、①一八六八年―一九一四年（社会調査の萌芽期）、②一九一五年―一九三一年（社会調査の展開期）、③一九三二年―一九四五年（社会調査の崩壊期〈制限期〉）、というものである。そして①が『調査史』Ⅰに、②がⅡに、③がⅢにそれぞれ符号するのであるが、その基調は近代国家体制への転換↓新たな社会問題の噴出↓戦時体制への突入を軸にして、そしてそこを基底する近代日本の生活像・歴史像の変容に棹さしながら、「行政権力の必

要から」だけでなく「人々の……さまざまな社会問題への肉迫であり告発」(Ⅰ・二二ページ)からはじまった社会観察・社会探訪・社会踏査が、「方法上の自覚化、調査方法論の生成」(Ⅱ・八六ページ)畢竟「制度化」を伴いながら科学的な社会調査活動へと質的に変化するが、結局のところそうした調査活動じたいが戦時体制下に枠づけられ形式化されてしまうプロセスとして描述される。この場合に興味深いのは、そのときどきの社会調査活動にたいして、先にとりあげた(b)から(e)の論点に周到に目配りをしながら接近しつつ、その全体像がきりむすばれるところで、畢竟「社会調査活動が理論探求、政策・運動活動とともに……相互循環的な活動領域であること」(Ⅲ・iページ)を確認していることである。そこでは、マクロ波の規定性に瞠目しながらも、なおも個々の調査活動のもつ〈能動性〉に思いをいたす氏の姿勢が読み取れる。それは社会学史を社会調査史研究を介して再構成しようとする氏の年来のテーマのごく自然なあらわれであるが、同時に個別調査活動の裡に時代と時代の波間で生きた人びとのさまざまな生活像と歴史像を見据えようとする視線にもつらぬかれているのだ。

三

川合氏の社会調査史研究にたいするスタンスとまなざしに、一人の社会学者としての矜持を維持しようとする部分と庶民の感性や立場に深い理解をよせる部分とが同居しているのを見る

のは、たいせつである。しかし、それはあくまでも編者としての〈位置〉において観取されるものである。編者以外のひとりひとりにそれが共有されているかどうかは、微妙である。むしろ、この種の大部な作品で寸分違わず編者の意思が貫徹していることはあり得ないし、考えようによっては、川合氏も指摘しているように「近代日本社会の歴史的展開におけるいくつもの多様な生活諸相、生活像の足跡を社会調査史という視点から再考察するうえで……初めからテーマや調査事例を限定したり一貫させ」(Ⅲ・iページ)たりしないことのメリットのほうが大きいかもしれない。それにしても、ひとりひとりの問題関心や研究テーマによって調査活動・調査事例を随意に選ぶことから派生する『調査史』全体をつらぬく体系性の欠如という印象はぬぐいきれない。累々述べるまでもなく、この種の仕事においては作品選択が命であり、そこに構成的な配慮がはたらくことは避けられない。しかし、川合氏はこの点についてきわめて寛容であるように見える。

ここでは『調査史』に収録されているひとつひとつの論稿に言及する余裕はない。むしろ、それらを推敲の跡がみえるものと一見してそれとわかる早書きのものに区分けすることぐらいはできる。もっともそれをいうなら、むしろ両者に共通して、川合氏の上述した社会調査史研究の視点が形式的に受容されていることこそが指摘さるべきであろう。なぜなら、その形式的受容の背後で記述的スタイルが跋扈し、調査方法にたいする関

心を先行させるものが目立っているからである。私の個人的嗜好でいえば、その中ではアチックミュージアムの生成に即してモノグラフと総合調査の間を読むことによって有賀喜左衛門の石上調査の制度的文脈をさぐろうとした竹内治彦氏、イリテラシーを抛城として細民調査のもつ近代の文脈にせまろうとした清川郁子氏の諸論稿が興味深かったが、それらとて平板な（あえていうなら通俗的な）調査方法史論を大きく逸脱するものではない。『調査史』に稿をよこした各人は、彼らがこだわった調査方法の向こうに一体何を見ていたのであろうか。私にはよく視えてこなかったと言わざるを得ない。

かつて川合氏等がその職業にたずさわった『社会調査方法史』において、イーストホープはやや旧びた知識社会学的接近とか運動史的検証とは系を異にするアングルから『社会調査方法史』の含意を次のように説いている。彼はまず、「社会調査の諸方法」の「起源」を「社会の革命的な諸変動の中」にもとめる。そして「諸方法」が畢竟社会変動の「理解と統御」をめぐる編みだされるものであるかぎり、「諸方法」を選ぶ調査者は「自らその望む変動の方向について……意思決定をしていく」とする。こうしてイーストホープにあっては、「社会調査方法史」の延長線上において発見される、社会的文脈に通脈した（調査者の）価値関係的態度に熱い視線がそがれることになる。そこには調査方法にからめてではあるが、調査者の認識―調査活動の裡に内在する〈実践性〉の契機をすくいだそうとするイー

ストホープの思いが読み取れる。『調査史』において調査方法へのこだわりをさまざまに表現してみせた諸氏が、イーストホープのこの思いにどのような反応を示すであろうか。私のもっとも知りたいところである。私の率直な感想を述べるなら、『調査史』とそれに前後して刊行された類書、とりわけ江口英一編『日本社会調査の水脈』との違いは、一にこの〈実践性〉の系譜（上からの「社会化」過程に符節をあわせているものを含む）へのアクセスの「差異」に起因するのである。

ただ念のためにいえば、私の本意はその「差異」をふくらませて『調査史』の荒っぽい棚卸しをおこなう点にあるのではない。むしろここでは両者の間の「差異」を見極めた上で、『調査史』において見え隠れする抑制された筆に「市井人」としての調査者への〈共感〉が込められているのかどうか、そしてそれがどのような質のものなのかをたしかめてみたい気持ちに囚われている。諸氏がどの程度意識していたかはさておき、とりあげられた調査活動・調査事例には多かれ少なかれ市井の風が揺曳している。川合氏がそこに魅せられていたことは容易に理解できる。そうしたものがどの程度共有されて個々の論の展開にはずみをつけているのであろうか。またこれ以外にも川合氏の調査過程論を受けて、いわゆる調査者と被調査者の〈出会い〉の文脈、〈社会学的文脈〉の復権と呼ばれる事態、そして調査過程の基底に伏在している調査者の、資料への怖れをどのように読みといているのか等々、尋ねてみたいことは尽きないが、も

はや私に与えられた紙数はない。いずれ別の機会にあらためて問うてみたいと思う。

『調査史』から日本近代の高揚から沈静への足跡を読み取るか、それともひたすら虚しい現実を堪えぬいた民衆像を浮き彫りにするか。結局、『調査史』を手にした読者の判断にゆだねられている。しかしいずれにせよ、社会調査史が社会調査論・社会学史の中ではほとんど無視されるか軽視されているというナイーブな疑問から始まってこれほどまでに大きな実をはぐくんだことに、正直言って驚きを禁じ得ない。『調査史』が社会調査史研究に向けて貴重な一里塚をなしたことは誰の目にも明らかである。それは今後とも読み継がれていくであろう。果たして一〇年後、二〇年後にどのような評価を得ているであろうか。いまから楽しみである。

吉原直樹